

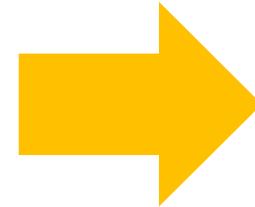
# 集中介入期が誕生した背景



# <高齢者の現状>

軽度認定者や虚弱高齢者の特徴の多くに「廃用性」の課題があり、本人・家族・親類・友人・地域社会・介護保険事業所等、それぞれに加齢に対する思い込みや誤った認識があるのではないか？

- もう、歳だからできなくて当たり前
- もう、歳だから頑張らなくてもいい
- もう、歳だから誰かに手伝って貰えばいい
- もう、歳だから無理をしなくていい



**本当にそうだろうか？**

# <軽度認定者の傾向を分析>

きっかけ

「痛みやしびれなどの有症状に対する不安」  
「生きがいや役割の喪失」



意欲の減退

「できること」や「していること」に関しても、取り  
組む意欲が徐々に減退



経過

大切にしていた趣味を諦め、活動量が減少する

「できそうなこと」を安易  
に諦めるという  
【悪循環】に陥っていく。

ならば……

もう一度、「元気になりたい。」「あの人にあいたい。」「畑仕事を再開したい。」  
という思いや意欲を喚起しなければ、事態の改善は見込めない。

# 【事態の改善を目指すために】

生活機能低下の原因や背景を探るために、必要な情報を収集し、現状を正しく分析し、機能向上のために必要な取り組みを提示し、合意結成を図る。

支援方針については、必ず予後予測を立てた上で、1ヶ月・3ヶ月・半年後の生活が想像できるプレゼンテーションを行う。

具体的に何をすればよいかについて、自発的に気付くよう促し、自己決定へと導くことが重要。そうすることが継続性につながる。

プレゼンテーションの方法・手段は、多様性を持たせることがポイント。  
～価値観の多様性～

- ポータブルDVDで、事業を動画で紹介し、意欲を喚起。
- 実際に教室を見学してもらい生の参加者・ボランティア・スタッフの姿を見てもらい安心を誘う方法。
- OB会等に参加してもらい、卒業生から教室案内を受ける。
- その他。

**誰かに言われたのではなく、「私が、〇〇したい」が大事。**

- 「いろんなことを、諦めていたけれど、参加してまたやれるようになりたい。」
- 「元気になった人からの声掛けで勇気もらったので、頑張ってみる」

# <生駒市の特徴的な介護予防事業の取組を紹介>

心身の状態像に応じた介護予防事業の展開に「とことん」こだわる。  
集中介入期→移行期→生活期の段階別、介護予防事業の展開を図る。

## 集中介入期の事業

心も体も整えないといけない人がターゲット、ここを集中的に丁寧にやらないとエンドレスのデイサービスの利用者となる。

そうなると社会参加の場が極端に狭小する。

### 【工夫していること】

- スタッフを十分揃えて、体の機能を整えながら、メンタルをサポートしていく仕組みをつくる必要がある
- 理学療法士や作業療法士、運動スタッフや看護師、介護福祉等の専門職に加えて、集中介入期の事業修了者がサポーターとしてスタッフに加わるのが大切。



- 専門職と高齢者ボランティアとのコラボレーション

### ● メリット

専門的なアドバイス(専門職)  
+ 同じ悲しみや辛さを分かち合える  
終了生からのピアカウンセリング  
的なフォローが同時に得られる。

### ● ポイント

リハ職ならだれでもいいというわけではない。事業趣旨を理解し、共に協働のスタンスで事業に加わってくれる人材が必要。  
教室終了生をサポーターに導入。  
短期集中・卒業ありきの教室運営

# <集中介入期の事業の組み立てについて>

通所型事業の担い手として、事業所加算をとっているデイサービスで、介護予防の実績もある事業所として社協が浮上。

- 生駒市及び社協にはリハ職の雇用がないため、リハ職を確保が大きな課題。
- 頼るべき「つて」を探し、事業創出について、リハ職関与の必要性について「思いのたけ」をぶつける。

## 【交渉の壁】

回復期病院で地域リハに強く関心があり、実績のある病院を紹介してもらうが、市の条件提示と病院の条件との格差が壁となる。



## 【コストの壁】

どこの病院でもいいわけではなく、決め打ちで交渉に臨んだため、コストの問題が発生。市の財政当局に事業計画を説明し、先行投資であることへの理解を求め、交渉を勧めた。

## <リハ職導入の計画>

- 初年度、集中介入期として、通所・訪問の両方に関与してもらい、生活を反映させた領域の中でのセラピスト活動を実践してもらおう。本事業のパートナー。リハ職が偉いわけでも市職員が偉いわけでもないパートナーシップ。
- 翌年より、通所型・訪問型事業のノウハウをマニュアルにまとめていただき、事業を生駒市内の回復期病院に継承できる流れを作る。
- 3年目に事業を市内病院との協力関係で進行する。



補助事業でなくなっても地域支援事業費で賄えることに配慮。



病院・市の財政当局に安易な計画でないことへの理解を得る事ができ、病院の協力及び予算の確保につながる。

# 《現行の介護予防事業の問題点》

- それぞれの介護予防事業が単発で行われていて、連動性がない。
- 二次予防事業の通所型で元気になっても、次の一般介護予防事業への移行がスムーズにできていない。
- 活動していない人達だから、定期的を送迎付きで運動を行えば元気になって当たり前。元気になった状態で、どうして次の居場所に移行できないかを検証。



坂道が多い街並みで、移動手段が少ないことがネック。  
バスに乗るのが不安、卒業前に次どうするか？  
移行期間の考慮が少ない事業のカリキュラムや自宅での生活と「通いの事業」との連動性がないことを確信。



なら、そのカリキュラムを作ればいい！！

# 《新しい取り組みで考えた事》

## 集中介入期の通所型事業 & 訪問型事業の連動

通いのサービスと訪問のサービスを一体的に提供し、どちらにもセラピストの関与を求めて、集中的にケアを行う事で、1年、2年、3年と元気に暮らしてもらう予算先行投資型事業を確立する。

## POINT

- 自宅での様子をうかがい、地域での暮らしぶりも合わせてアセスメントし、活動や行動範囲を拡大していける取り組みを考える。
- 痛みや関節可動域の評価を始め、環境調節や運動メニューなどを考案し、通所で実施しながらその効果判定を訪問型でも実施。不足の部分をまた、通所で補う、もしくは訪問型のセルフケア指導で補足。

そうした流れが集中介入期の自立支援には不可欠な要素である。

# 《移行期の事業》

## 段階的な事業展開の中、虚弱→元気の狭間に存在する高齢者を支援する事業

- ここでは体力の増強と一般の介護予防事業等への移行を目指している。
- 手厚い介護予防事業から。手薄い介護予防事業へ移行させ、機械も使用せず自重の運動を中心とし、転ばない体づくりとして講話も含んだ教室展開。
- 集中介入期を終了する人の中で、移行期に移行する人は「体力」「筋力」「バランス力」「持久力」等に課題を残している人であるため、生活期の事業への移行がスムーズに図れるよう配慮。

### 教室内容

運動のみの実施ではなく、座学にて転ばないための環境調整や水分摂取の必要性など、健康管理まで幅広い講話を含む

### スタッフ

市の保健師(1名)と介護予防運動指導員(1名)に高齢者ボランティア(8名)で運営

### 特徴

集中介入期から移行期に来る人が安心して事業移行できるよう、地域ケア会議にもスタッフは参加。受け入れ体制の準備。運動時に注意が必要な参加者が多い為、集中介入期のスタッフからの申し送りは丁寧に実施。

セラピストから留意事項をしっかりと聞いておき、リスク管理を徹底。

教室運営中に困ったことがあれば、いつでも集中介入期のセラピストに相談できる体制確保  
3ヶ月感の短期集中型にて、生活期の事業へと移行を図る。

# 《生活期の事業》

- 従前からある一般の介護予防事業に加えて、新たに食を中心とした会食サロンとして「ひまわりの集い」をスタート。
- 高齢者の食生活改善事業に以前、協力をいただいたことのある「生駒市健康づくり推進員連絡協議会」に事業を委託実施。
- 現在2教室あり、週に1回教室と隔週1回の教室で、閉じこもり予防の事業として人気爆発。

## 教室内容

朝

- 10時30分 : 開始  
: レクリエーション(季節に応じた内容展開)
- 11時45分 : トイレ休憩
- 11時50分 : 昼食会
- 12時40分 : おやつとコーヒー
- 12時50分 : お別れの歌
- 13時00分 : 解散

## スタッフ

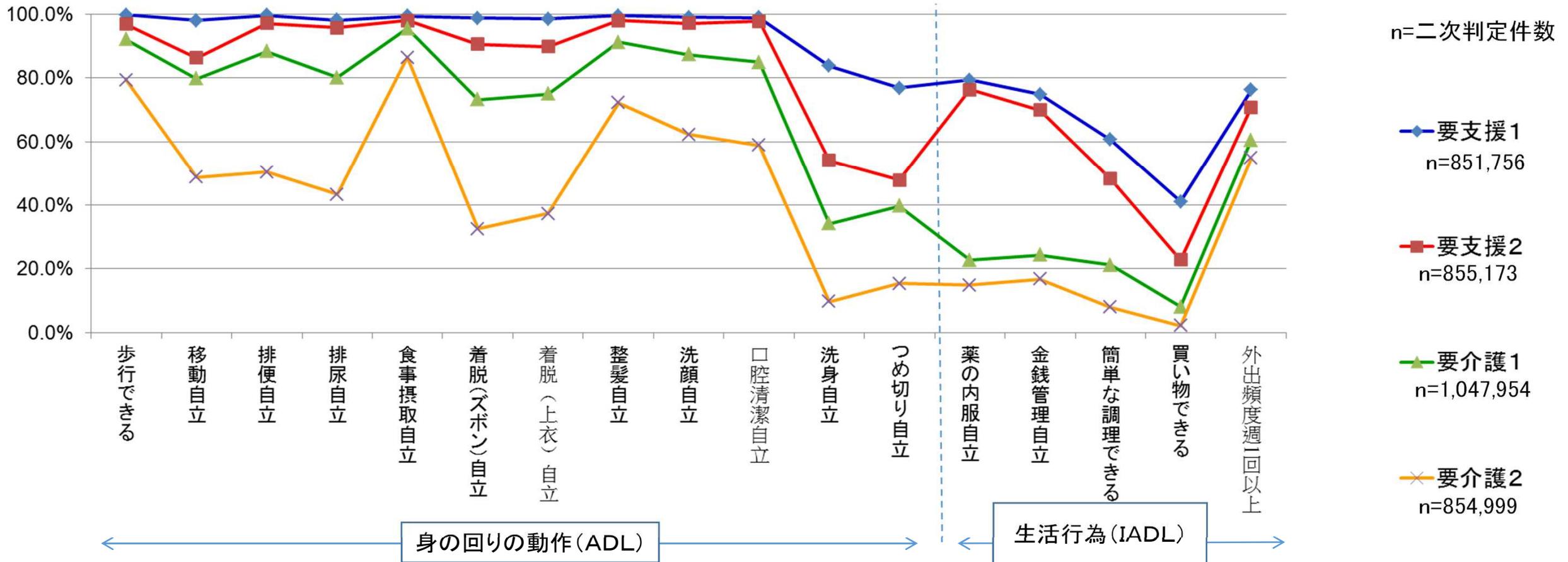
生駒市健康づくり推進員連絡協議会の会員10名程度

## 特徴

- 献立作成から買い物、料理、レクリエーション、利用料の徴収、報告書作成等全て会員が実施。
- 出来立ての料理を皆で一緒に食することが、和をうみ、友達作りの場に発展
- 自宅では、少量摂取の高齢者がここでは、完食
- 料理を再開しようという意欲の醸成
- バランスのよい食材購入への意識向上

# 4. 要支援者のケアマネジメントの特徴

- 要支援者は、ADLは自立し、わずかにIADLの一部に援助を要する程度。このため、日常生活上の不自由さを援助し、あるがままの状態を支えるサービス提供が行われてきた。
- 二次的に生じる生活上の問題を予測して、不自由さを最大限軽減する「自立支援型ケアマネジメント」の発想をもたなければ、重度化を食い止めることは困難。



岡山県長寿社会課作成

【出典】平成23年度要介護認定における認定調査結果（認定支援ネットワーク(平成24年2月15日集計時点)）